今月の窓

森林の取引価値

本稿は、本号掲載論文の一つ「林地取引の実態と森林組合に求められる役割に関する考察」に若干関連しているに過ぎず、この場所をお借りして愚見を述べさせていただいていることを、まずお断りしておく。

今、山林売買は増えているという。「山を買う」（福﨑剛）によると、コロナ禍での三密回避やソロキャンプのブームが背景にあるそうだ。かつて山林は富の源泉であり、「山持ち」には金持ちを連想させる響きがある。立木の価値が高かったためで、「官僚たちの夏」（城山三郎）でも、主人公の風越信吾は進学費用を工面するために屋敷森の杉の木が何本か売却されたと言っている。モデルの通産官僚は1913年生まれだそうだから戦前の話だ。

山の取引に際しては、価値は立木のみ認め、そこから搬出コストが差し引かれることが多い。今は低迷する材価と高い人件費があいまって、結局ほんのわずかな金額（あるいはマイナス）になってしまう。気軽に山が買えてしまうわけだ。

森林は生態系サービスをもたらしてくれている。水の浄化、二酸化炭素吸収・酸素供給のほか、「森は海の恋人」で山のミネラルは川を伝って我々の食する水産物の栄養にもなっている。洪水防止、種の保存（今日的には獣害という負の面もあるが）も間接的だが大きい。日本ではないがアマゾンは「地球の肺」とも「生命のゆりかご」とも言われている。1997年発行の「林地・立木の評価」（小倉康彦、小倉康秀）でも、林地の価値は、その「地位」（地味。林地の肥沃度）と「地利」（搬出容易性）が規定することとなっているが、肥沃度の評価において指標植物を活用することとされ、今日のように自然資本が注目されるかなり前から、生物多様性的な観点が内包されている。皆、森林に材木供給以外の公共的価値を直観しているのだ。

それが、取引となると、価格に織り込まれるのはほぼ立木のみになる。正当な対価を払わずサービスを享受しているという点では、途上国から鉱物をかすめ取ってぼろ儲けしてきた強欲トレーダーたちと我々はどこか似てしまっていないか？　持続可能な方向へ頭を切り替えることが必要だ。

私も社会人人生の半分近くを金融市場で過ごしてきた手前、将来キャッシュフローを現在価値に割り引く手法に異を唱えるものではない。問題は、生態系サービスの存在自体は認めつつ、将来キャッシュフローに加算しようとせず、相変わらず山の価値の計算において材木の価値しか計算式に入っていない点。炭素吸収以外の貢献を森林吸収系のカーボンクレジットの値付けにどう反映させるのか、という話と同根だ。

さて、今月号で触れられる林地流動化。可能なかぎり、立木以外のことも考えながら行われるようになってほしいものである。地縁があり山に親しんでいる方がこれらに共感してくれる場合が多いと想像する。その意味で、地域に根付き、かつ短期的な利益のみを目標としない組織として、地域の森林組合に、林地流動化でのより大きい役割発揮を期待したい。同時に、第一次産業特化型のシンクタンクとして、我々には生態系サービスの価値にかかる研究を進展させる責務があることを自覚しておこう。

（（株）農林中金総合研究所 常務執行役員　小畑秀樹・おばた ひでき**）**